



## 坊さんとロバ (時の氏神)

(4月のごあいさつ)  
2020年4月1日(水)

3人の息子の父親が死んだ。遺産はロバ17頭。長男は $1/2$ 、次男は $1/3$ 、三男は $1/9$ を受取るようにと遺言が残してあった。しかし、17頭は、2でも3でも9でも割りきれない。どんな風にしようかと、3人が困っているところへ、1頭のロバを連れた坊さんが通りかかった。息子たちはどうすればいいのかと坊さんに相談した。坊さんは、しばらく考えてから、遺産のロバ17頭に自分のロバを加えて18頭とし、長男にはその $1/2$ の9頭、次男には $1/3$ の6頭、三男には $1/9$ の2頭を分け与え、残った1頭を連れて去って行った。

この坊さんのような人を、時の氏神という。人が困っているときにタイミングのよく現れて、絶妙なアイデアを生む人。世の中には、この坊さんのような貴重な役割のできる人がいて、この人のおかげで、困ったことがすべてがうまく行くこともあるようだ。

物にも、人にも転期がある。化学物質に触媒というものがあり、このような役割を果す。化学反応は原子を組換え、別の物質に変化する。またある物質を大量投入すると反応速度は加速されるが、それ自身は化学変化をうけず、しかも反応速度を変化させる物質がある。

人について言えば、人や書との出会いが、その人の人生を変えるような場合がある。

孔子は易教において、“根本を誤ってはならない。始めは一厘一毛の違いも、後には千里の差となる。”と言った。それを読んで司馬遷は、史料と広い見聞により、中国最初の歴史書“史記”を著した。

数学で、微分や積分公式を見つけたり、問題を解く際、この坊さんのロバという方法がよく出て来る(大村平著 微分積分の話 日科技連刊)。どうしようもないとき、ロバを1頭加えて、引くようなことをすると問題が簡単に解ける場合がある。例えば、 $x^2 + 2x = 3$ を解くとき、両辺に1を足すと  $x^2 + 2x + 1 = 4$ となるから、 $(x + 1)^2 = 4$ となり  $x + 1 = \pm 3$ と変形し、 $x = -3, 1$ となる。

しかし、この話は坊さんが来る前に、父親の遺言の2と3と9の最小公倍数である18を考えれば済むことだ。長男 $9/18$ 、次男 $6/18$ 、三男 $2/18$ で17頭のロバの分配は出来てしまう。父親は、そう考えて遺言したのかもしれない。わざわざ1頭を加えて18頭にすることもなかった。17頭はきれいに分けられるから、坊さんも、ロバも必要なかったことになる。とは言っても、やっぱり、坊さんとロバが登場した方が話はおもしろい。